

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：27101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00550

研究課題名（和文）中国浙北音の語音史的研究

研究課題名（英文）A Phonological History of Zhebei Pronunciation

研究代表者

平田 直子（HIRATA, NAOKO）

北九州市立大学・外国語学部・教授

研究者番号：40572475

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果については、まず江戸時代に著された韻図『磨光韻鏡』をはじめとする唐音資料と明清時代の中国呉方言を反映していると考えられる中国文献の字音を、中古音の音韻体系の枠組みに当てはめ、整理分析する作業を行なった。『磨光韻鏡』については字音データを公表できたことは成果の一つである。次にそれら浙北音系（本研究では杭州音を含む浙江北部の方言を指すことにする）唐音資料と中国文献の字音体系をそれぞれ比較考察し、声母体系について、両者は大枠で非常によく似た枠組みを有していることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

先行研究によると、近世唐音資料は、その音韻面の特徴に基づいて浙北音系、南京音系、官話系などに分類される。このうち、本研究では、中古濁音声母のかな表記に濁音のカナ表記を当てていることを大きな特徴の一つと判断し、浙北音系と考えられる資料（とくに『磨光韻鏡』）の字音調査を行ったことは一つの成果といえる。同時に、それらの資料と同時代の中国呉方言資料と比較考察を行ったことは、呉方言史の研究において有益である。特にこれまであまり注目されなかった『諧声品字箋』『音韻正譌』を用いたことは独創的であると考えられる。また浙北音系唐音と中国呉方言資料の類似性を指摘した。

研究成果の概要（英文）：The main results were as follows. First, I compared Chinese Rhyme Dictionaries, which are considered to reflect the Chinese Wu dialect of the Ming and Qing dynasties, and the phonological system of "To-in" materials to the framework of the phonological system of the Middle Chinese, after that performed the work of organizing and analyzing them. Then, we published the phonetic data of "Mako-inkyo". Next, I compared the phonological system in the Chinese texts with the phonological system of "To-in" materials, and pointed out that the two have very similar frameworks in terms of the systems of Initials.

研究分野：中国語語音史

キーワード：磨光韻鏡 唐音 浙北音

1. 研究開始当初の背景

本研究課題で主として取り上げる唐音資料の一つである『磨光韻鏡』は、江戸時代の韻学者文雄(1700~1763年)によって著わされた。文雄は唐音による『韻鏡』研究および『磨光韻鏡』による唐音研究を実践したとされている。それゆえに『磨光韻鏡』唐音の研究は、従来日本語学の分野においてなされることが多かった。たしかに『磨光韻鏡』は呉音・漢音に加え唐音のかな表記がなされているだけでなく、韻図であることなど研究価値が比較的高いといえる。しかし『磨光韻鏡』唐音はそれだけではなく、著者の文雄が当時の杭州音に基づいたものであると述べていることや収録字音の多さなどから近世唐音の代表的資料といえる。また『磨光韻鏡』かな表記には体系的に取り扱いの不可解な点や、ユニークな音韻特徴が数多くあることがわかっていることなどを考えると、中国語語音史の観点からのアプローチをもっと行えるのではないかと考えた。こうした点に着目し、杭州音の帰属方言である呉方音史の研究に用いることができる有用な言語資料であるのではないかと考えた。つまりこれまでとは違った角度から『磨光韻鏡』唐音を利用することができると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、江戸時代に著された韻図『磨光韻鏡』をはじめとする唐音資料、明清時代の中国呉方音を反映していると考えられる中国文献、そして現代中国語方音資料を利用することで、明清時代の浙北音(本研究では杭州音を含む浙江北部の方音を指すことにする)の音韻体系を考察し、中古音から現代音までの語音変遷と特徴を明らかにしようとするものである。

3. 研究の方法

(1)『磨光韻鏡』を含むその他の近世唐音資料を用いて、中古音の音韻体系の枠組みに当てはめ、整理分析を行う。続いてそれら近世唐音資料を比較対照することで、それぞれの資料が反映する音韻特徴を把握し、浙北音派、南京音派、官話派などのように音韻面の特徴に基づいて、各資料のグループ化を試みる。

(2)その資料の中で浙北音の特徴を有するグループを用いて詳細な分析と考察を行う。その後、明清時代に出版された呉方音、特に浙北音を反映していると考えられる文献を用いて、上述の唐音資料との比較対照研究を行う。

4. 研究成果

(1)近世唐音資料は、資料の性格上内容や性格が複雑であり、記載されている中国音もいくつかの種類がある。先行研究によると、近世唐音資料は、その音韻面の特徴に基づいて浙北音系、南京音系、官話系などに分類される。このうち、本研究の浙北音系は、中古中国語の濁音声母に対し、濁音のかなを当てていることが大きな特徴であり、それを浙北音系と判断する一つの基準として資料を収集した。

その結果として、浙北音系資料は以下①~⑩のようなものがあることが分かった。

- ①『磨光韻鏡』唐音、②『唐音為文箋』(1879年)、③『忠義水滸伝解』(1757年)、
- ④『四書唐音辨』(1722年)、⑤『唐詩選唐音』(1777年)、⑥『仏遺教経』(1662年)、
- ⑦『法華経普門品』(1683年)、⑧『唐話纂要(和漢奇談巻6)』(1716年)、⑨『三字唐話』、
- ⑩『南山俗語考』(1812年)

(2)『磨光韻鏡』の唐音を、『方言調査字表(修訂本)』(中国社会科学院語言研究所 商務院書館 1981)を用いて中古音の音韻体系の枠組みにあてはめる作業を行った。『磨光韻鏡』に用いられている転図と中古音の撰の対応がわかるように工夫した表を作成したが、『磨光韻鏡』には異体字や生僻字が多く収録されており、その入力にかなり時間がかかった。また『磨光韻鏡』各転図中に配列された字音と『方言調査字表(修訂本)』の中古中国語の枠組みがうまく対応しない字音グループがあり、その処理や扱い方などに難しい面があった。対応しない理由については、まだ解決できないままとなっているが、『方言調査字表』の枠組みに工夫を加えることで、このような問題に対応した。凡例にその旨を記載し字音のデータを公表(平田 2021 『磨光韻鏡』唐音と中国語中古音対照表『北九州市立大学外国語学部紀要』第152号)した。今後の研究によって、今回の対応の仕方の問題があることが分かれば、修正を加えたいと考えている。『磨光韻鏡』唐音については、このような便利なデータはこれまで公表されていない。このため、こうした基礎的な研究は今後、唐音研究・日本語音史・中国語音史研究を行っていく上で、役立つものであると考える。その他の浙北音系唐音資料のうち、『唐音為文箋』、『四書唐音辨』、『唐詩選唐音』は原本にあたって字音調査を行った。また上記以外の浙北音系唐音資料『忠義水滸伝解』、『仏遺教経』、『法華経普門品』は先行研究をもとに中古音との対応表に書き換える作業を行った。

(3)中国の明清時代の韻図・韻書については、当時の呉方音を反映していると考えられるものを中心に、先行研究を収集した。その過程で、『諧声品字箋』(1677年)、『音韻正譌』(1644年)が『磨光韻鏡』と近い体系を表しているのではないかと仮定された。そこで当時の杭州音を反映

していると考えられる韻書『諧声品字箋』と、安徽宣州呉語系の音韻を反映していると考えられる韻書『音韻正譌』の各字音を中古中国語の枠組みに当てはめる作業を行った。両文献について専門的に研究された先行研究があり、同音字表の附録があったため、これを利用した。上記の字音調査を進めると同時に、それぞれの音韻特徴についても分析も行った。

(4) 浙北音系唐音資料の字音整理の過程で、軽唇音声母の奉母と微母の音韻特徴に注目した。『磨光韻鏡』唐音のかな表記は奉母字と微母字を区別していることが分かった。現代呉方言では奉母と微母は同音になることが多く、またその他の浙北音系唐音資料でも体系的には見られない特徴である。これについて、2020年に学会で報告をした。その後もこの問題について研究を進めていき、同じ時代の中国側の文献と比較考察を行った。すると《諧声品字箋》(1677年)において、『磨光韻鏡』唐音と同じ特徴、すなわち奉母が非敷母と合流せず、また微母とも区別されているという興味深い特徴を有していることが分かった。《諧声品字箋》に関する先行研究では、当時の杭州音(読書音)を反映しているという指摘があったが、『磨光韻鏡』唐音もまさにそうした当時の杭州音(読書音)を取り入れた結果なのではないかという考えを示した。(平田2022『『磨光韻鏡』唐音と明清呉方言——奉母・微母のカナ表記を中心に——)。

(5) 『磨光韻鏡』唐音の声母体系について

これ以外の声母の特徴についてはいうならば、『磨光韻鏡』とその他の浙北音系唐音資料とでは大枠では類似していることが分かった。とくに舌音の知組と歯音の精組、莊組、章組の現れ方は複雑であるが、非常によく似たあらわれ方をしている。『磨光韻鏡』唐音の舌音・歯音の部分のみを表に掲げると、以下のようになった。

五音	組	声母	例字	推定音価
舌音	知組	知母2等	ツキ・ウ ツアム ツエ 罩 詆 摘	ts
		微母2等	チユアン ツエン 憇 擘	tʃʰ
		澄母2等	ツア、ツエン 茶 橙	dz
		知母3等	チュイ チム チヤン チヨン 追 珍 張 中	tʃ
		微母3等	チュイ チヤン チヨンチュイ 獮 暢 籠 猪	tʃʰ
		澄母3等	チュイ チュイ チム チヤン チヨン 住 鍾 陳 長 虫	dʒ
歯音	精組	精母	ツアウ ツアイ ツエン ツイム ツヤン ツヤン 早 最 增 津 將 縱	ts
		清母	ツアウ ツエイ ツエン ツイム ツヤン 草 崔 贈 親 槍	tsʰ
		從母	ツアウ ツアイ ツエン ツイム ツヤン ツヤン 曹 罪 層 秦 牆 從	dz
		心母	スウ、スウイ スアム スエン スヤン 蘇 思 三 線 相	s
		邪母	ズイム ズヤン ズヤン 燼 像 松	z
	莊組	莊母	ツライ ツウイ ツイム 阻 滓 簪	ts
		初母	ツライ ツウイ ツイム 初 差 參	tsʰ
		崇母	ツライ ツウイ ツイム 雛 事 岑	da
		生母	スライ スウイ スイム シュアン 所 史 森 霜	s
	章組	章母	チエ、チユン チン チョ 遮 准 蒸 粥	tʃ
		昌母	チエ、チユン チン チョ 車 春 称 触	tʃʰ
		船母	チエ、チユン チン チョ 蛇 唇 繩 贖	dʒ
		書母	シユイ スウイ シユイ シム シン 書 始 水 深 声	ʃ
		禪母	ジエ、ジュン ジン ジョ 社 純 承 塾	ʒ

これをさらに細かくまとめると、以下のようになる。

声母	主として現れる声母	例外的なあらわれ方と条件
精組	ts	tʃ 止撮合口
知組2等	ts	tʃ 江撮
莊組	ts	tʃ 止撮合口、臻撮合口 宕撮開口、江撮、通撮
知組3等	tʃ	ts 止撮開口
章組	tʃ	ts 蟹撮開口、止撮開口

浙北音系唐音資料でも上表のようなあらわれ方をしている。
ただし、中国文献との比較においては、まだ分析が十分ではない。《諧声品字箋》や同時代の《音韻正譌》との比較を中心にその他の呉方音系韻書の研究が必要である。先行研究では音価推定をなされているが、その部分も含めて更なる考察が必要である。

(6) 『磨光韻鏡』の唐音は、これまでの国語語音史の研究においては、韻図という性格から、一種の人工的な模範音であり、資料としての価値は乏しいという指摘があった。しかし、(4)で記したように同時代の中国側の韻書との類似性を指摘できる部分もある。この点についてはそれがまさに当時の杭州読書音であったということ、李寧 2021 (「試論《唐話纂要》的音系性質」方言、第 1 期 55-63 頁) の中で“呉式官話”と称されているものなのではないかと考えている。その意味において、『磨光韻鏡』は当時の読書音系杭州音 (広義の浙北音) を研究するうえで、価値ある資料であり今後も継続して研究を進める必要があると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 平田直子	4. 巻 153
2. 論文標題 『磨光韻鏡』唐音と中国語中古音対照表	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北九州市立大学外国語学部紀要	6. 最初と最後の頁 137-253
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 平田直子	4. 巻 60
2. 論文標題 『磨光韻鏡』唐音と明清呉方言 奉母・微母のカナ表記を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 九州中国学会報	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 平田直子
2. 発表標題 『磨光韻鏡』の唐音と明清時代の呉方言
3. 学会等名 九州中国学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------